



罪の夜想曲

下

罪の夜想曲 下

一九七五年十月二十五日 初版印刷
一九七五年十月三十日 初版発行

著 者 梶山季之

装幀者 濱野彰親

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇

郵便番号 一〇一

電話 出版部 (〇三)二三〇一六三六一
販売部 (〇三)二三〇一六一七一

印刷所 株式会社常磐印刷所

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします

定価七五〇円

罪の夜想曲 下
目次

第四章

奇妙な休日

9

野望の企画書

16

バラの痣

22

奇しき縁

29

すれちがい

35

銀座からの便り

42

抜け道

49

マニラへ

56

大胆な賭け

64

整形手術

71

義理と人情

79

物盗り説

87

第五章

ダイヤの首飾

94

盲目の客

100

山林地主

108

代理人復讐

115

異国にて

122

アルプスの黄昏

129

幻覚の世界

135

ああ、女王陛下！

142

息子を売る

147

第六章

泪の再会

157

追いつめる

165

容疑者逮捕

175

恐喝

183

ニセの旅券

187

終章

陥落 194

裏付け 203

ハルの証言 212

『地獄よりの使者』

220

心の翳り 228

呪われた顔 241

自白 247

積乱雲の彼方 253

あとがき 260

罪の夜想曲
下

第四章

奇妙な休日

一

……その日曜日は、楠本茂にとっては、複雑な感情を味わいつづけた一日であった。

自分の生涯で、こんな波瀾万丈と云うか、変化ある一日はなかった……と云えるだろうと思われる。

彼は几帳面な性格で、毎晩、日記をつけているが、その日だけは、日記をつける気力もなかった位であった。

まあ、時刻を追いながら、正確にしているしてみよう。

午前八時ごろ、松平平松総務部長から、

——ボスの容態が少し変だと云うことですが。ただ今、病院から連絡がありましたので、お知らせします。

と、電話が入った。

ボスとは、云うまでもなく、コンツェルンの総帥である郷金之助のことだ。

彼は、自分の社長を「ボス」などと呼ぶ云い方は嫌い

だが、軽薄な松平は、よくそんな表現をするのだった。

それで楠本は、松平に、

「これから病院かね」

と訊いた。すると、

「いいえ、今から奥さまを迎えに上って、それから病院に駆けつけます——」

との返事だ。

なにはともあれ、彼は電話を切って、顔も洗わずに外出の支度をしたが、ふっとその時に、

△社長秘書だった癖に、なぜ、すぐ病院へ駆けつけないんだろう。愚知らずめが！▽

と思ったことを覚えている。

日曜日なので、運転手もない。

楠本は、自分でハンドルを握って、郷金之助が入っている病院へ赴いた。

宿直だった医師に会い、容態をきくと、

「さほど悪化したわけではありません。昨夜でしたが

……カナ文字板を指さして、クスマト、クスマト……という四文字を、看護婦に訴えられるんです。それで奥さまにお知らせしたら、男の方と一緒に、奥さまが訪ねて来られましたね……長いこと病室に居られて、午前一時過ぎに、患者の疲労ぶりが目立つので、お帰りください

たような次第でして——」

と云うことであつた。

これでは、松平の電話と、少しく話が食い違ふ。

郷金之助は、楠本を指名したので。

ところが、看護婦は、クスマトなる人物がわからないから、郷さと子に尋ねの電話を入れた。

すると、さと子夫人は松平と二人でやって来て、午後九時から午前一時までの四時間、金之助になにかを追及したらしいのである。

言語障害にかかった金之助のために、カナ文字板がベツドに用意してある。

本人は、耳は聞えるが、言葉は喋言^{しゃべ}れないのだった。

だから、客が来て、見舞いの言葉などを述べると、その文字板を指でおさえて、

——ア、リ、ガ、ト、ウ。

と、相手に知らせるのである。

へいったい、何の話をしに来たのか？ 本人は、私に会いたいといったのに！

△午前一時に病院を出て……午前八時に私の家に、容態が変だと、電話してくる。その間、どうしてたんだらう？

楠本茂は、首を傾^{かた}げた。

医師の話では、完全回復の見込みはまずなくて、生ける屍^{しかばね}のような状態で衰弱死することであらう……と云うことだった。

目下は、意識は明瞭であり、半身不随と言語障害だけで、栄養の点では、何人にも遜色ない位だとの診断である。

若い時から共に苦勞して来た郷社長が、生ける屍とは悲しい限りであつた。

楠本は、特別病室に入つて行つた。

「やあ、社長。今朝、松平君から連絡がありまして……それで駆けつけて来たんです……」

彼は云つた。

郷金之助は、文字板をとれと顎で指示してから、指でひとつ、ひとつ、片仮名文字をおさえはじめた。

——サトコハ、キミガ、リョコージュダ、ト、イッテイタ。ホントウ、カ。

「冗談じゃありませんよ。昨夜も、八時から家に帰つてました」

——スルト、アイツト、マッピラガ、ウソヲ、ツイテル。

「へいったい、なんの話なんです？」

——キミモ、シツテイル、ハズダ。ミカノコドモノ、

コトダ。

「ええ、ええ」

——ユクエ、フメイ、ノ、ママカ？

「調べているんですが、どうやって病院を抜け出したのか、わからないんです」

——コロサレタ、ノデハ、ナイダロウナ。ミヨコ、ハ。

「警察にも、届け出をしてあります」

——トコロ、デ。

「はあ……なんでしょう？」

——ツマガ、イッテイタ。

「ほう、なんと？」

——アノ、ミカガ、ニランセイ、ソーセージヲ、ウンダ、ソウダ。

「ソーセージ？ 食べるやつですか？」

——バカ。フタゴ、ダ。

「えッ！ それは、本当ですか？」

——ヒトリ、ハ、ミヨコデ、モウ、ヒトリハ、オトコノコ、ラシイ。

「社長……ど、どうして、そんなことが……？」

——ミカ、ノ、イシヤガ、テガミヲ、カイテ、シンダ。

「へーえ！ それは、信じられませんか」

——ミヨコ、ノ、ユクエト、ソノ、オトコノ、コドモヲ、サガシテ、ホシイ。

「わかりました。しかし、手懸りは？」

——ナイ。ワシノ、イサン、ハ、ソノ、オトコノ、コニ、ユズル。イシヨ、ヲ、サクセイ、シタクテ、キミヲ、ヨンダ。

「むろん、公正証書にしておきますね？」

——ソウダ。タノム。サトコ、ハ、ナニカ、マッピラト、タ克蘭デ、イル。ケイカイ、シテクレ。

「わかりました……」

楠本茂は、大きく肯いた。

活字にすると、数十行の会話であるが、むこうは、ゆっくり文字を一字ずつ指で迎ってゆくだけに、楠本としては、気が遠くなるような苛立たしくて長い時間を感じられた。

二

病院の受付にある公衆電話から、郷家に電話してみた。

すると、女中頭のハルが応対に出て、

「あ、楠本さんですか？ 奥さまは、昨夜から病院へ詰めておられますけど……」

と云う。

△病院へ詰めてるだど？▽

楠本は、耳を疑った。

彼は電話を切り、しばらく考えた末に、松平総務部長の自宅に電話を入れた。

松平の母親が出て、いきなり、

「やはり、いけなかつたんですか？」

と云った。

「なにがです？」

彼は訊いた。

「社長さん……ですよ」

「ええッ？」

彼は絶句してしまった。

「息子は、社長の容態がおかしいから、今夜は徹夜になると申してましたけれど……やっぱり……」

楠本は、心の中で、

△ウーム、畜生！▽

と思ったが、さり気なく、

「ご心配いただきましたが、無事、峠は越しましたので、ご安心下さい……」

と云って受話器をおいた。

そして肩で、ふーッと大きな息をしながら、

△わかつたぞ。姦婦姦夫め！▽

と、心に叫んだ。

さと子夫人も松平も、昨夜、家には帰っていない。

二人とも、病院に詰めているとか、徹夜だとか、家人には云い繕^{つくろ}っている。

しかし医師の話では、午前一時に病院を出ているのだ。

となると、どこへ行くか？

若いアベックならばとも角として、中年を過ぎた男女が、その時間から行きつくところは決まっている。

△さと子夫人と松平とは、舊^{たぐ}ならぬ関係にある！き

つと、そうだ！▽

△そして、なにかを企んでいる！▽

楠本は、車を運転しながら、つよくそう確信したのであった。

——ところで。

家に戻ってみると、息子の俊吉のところに、金之助の長女である玲子が遊びに来ていて、折り入って二人で話がある、と云う申し入れた。

バガボンドとなることを、高校生時代から目指してい

た俊吉である。

だから、父親として彼は、
△自分の息子が外国で野垂れ死にしようと、決して嘆
くまい▽

と、自分自身に云い聞かせて来た。

その俊吉が、とつぜん日本へ戻って来て呉れて、ヤレ
ヤレ、放浪の旅も終ったらしいわい……と安堵していた
のに、こんどは藪から棒に、

「玲子さんと結婚したい。玲子さんのご両親の許しを貰
って欲しい」

と云うのだ。

これには、彼も呆れ果てた。

それは、結婚は本人同士の自由だ。

法律でも認められた結婚年齢に、双方とも達している。

親がとやかく云っても、仕方がない。

しかし、双方の両親の許可となると、話はややこしい
のである。

とくに、さと子夫人となると、難物であった。

なにしろ、我ばかり強い女性だ。

貧乏華族の出身のくせに、なにも頼るものがないか
ら、血筋だの血統だのを、やたらと重んじたがる。

その意味で、息子の俊吉は、血統もよいわけではなく、

財産も定収入もなく、ただの芸術家でしかなかった。

さと子夫人が、これらの点に難色を示すことは、目に
みえている。

彼は玲子に云った。

「私は、俊吉の才能は信じています。しかし、楠本家に
はさしたる財産も、立派な血筋も流れていません。私の
父はカマボコ屋でしたし、祖父は炭焼きだったそうで
す。そんな家系の息子に、お母さまが、あなたを嫁に呉
れるとでもお思いなんですか？」

——と。

すると玲子は即座に、

「あたしは、財産や家系と結婚するのではございませ
ん。あたしは、俊吉さんの人柄、そして才能を愛してい
るんです」

と答えたのだった。

「よし、考えてみよう……」

と、楠本は返事したが、ショックな事件は、まだま
だ、それでは終らなかったのだ。

三

楠本茂は、十五年前に妻を喪っていた。

後妻を貰うことを周囲は奨めたが、息子のことを思つて、彼は承知しなかった。

そんな彼に、郷金之助が、渋谷道玄坂にある丸山町の芸者——水原裕子を紹介して呉れたのである。

——男と云うものは、仕事の上でいろんな苦労がある。しかし仲間や身内には話せないから、フラストレーションが心の内に鬱積してゆき、仕事面での支障を来たす。——それを解決するには、愛人を持つことだ。わしだって、妻には云えないことを美加に打ち明けることで、どれだけ救われているか判らない。

——きみも、氣立てのよい、料理づくりの上手な女性を、一人ぐらい囲った方がよい。

——俊吉君も外国へ行くんだし、氣楽に落ちつける隠れ家を、一軒ぐらいは持っていてもいいじゃアないか……。

金之助は、そう云って、何人かの芸者を紹介して呉れた。

それで交際してみて、
△この女ならば——▽

と惚れ切ったのが、水原裕子だったのである。

店を出す資金は、金之助が、

——再婚の祝いだぜ。

と冗談を云って、出して呉れた。

その金之助から、二人の子供を探し出して遺言状をつくれ、という命令だ。

その上、息子からの結婚話である。これまた郷家と関係がある。

彼は、台風と洪水とに一時に見舞われたような感じで、すっかり疲労困憊した。

なにか、家に居堪れない感じである。

お手伝いさんに着物を出して貰い、ふらりと散歩のような調子で家を出たが、行くところは裕子が経営している『くすもと』しかない。

格子戸をあけると、若い娘が出て来た。

そして、丁寧に三つ指をついて、

「どちらさまでしょうか？」

と云う。

彼は苦笑した。

仮にも彼は、実質的なオーナーなのである。どちらさまですか、もないもんだ。

「女将……いるかね？」

楠本は云った。

いや、正確にいうと、そう云いながら娘の顔を見て、

△ハテ……どこかで会ったような……▽